

松尾文夫先生のこと

上智大学教授（文学部新聞学科）

奥山 俊宏

日本エッセイスト・クラブと私が初めて出会ったのは、振り返ってみれば、私にとって学生時代の恩師にあたる松尾文夫先生のおかげだった。二〇一七年三月一四日のことだ。

クラブの理事だった松尾先生は、当時、朝日新聞の記者だった私を新橋のクラブ事務局での例会に呼び、私から会員の皆様に、『パナマ文書』報道に携わって』とのテーマで話をする機会を与えてくださった。

共同通信社のワシントン支局長を務めるなど国際報道の現場で活躍したジャーナリストとして、松尾先生はその三〇年前の一九八七年夏、東京大学の新聞研究所で『日米比較ジャーナリズム論』の集中講義を担当した。その新聞研究所に所属する学生の一人が私だった。

松尾先生にとって、私は決して、出来の良い学生ではなかったように思う。

正直に告白すると、私は、松尾先生の授業に一度も出席していない。しかし、松尾先生を囲む食事会にはほぼ毎回出席した。見ていただいた作文の出来を褒められたこともない。

そんな私であっても、松尾先生は教え子として遇した。

私たち松尾先生の教え子は平成が始まった年に大学を卒業した。そして、その後、実に三〇年の長きにわたって絶えることなく、ほぼ毎年、

松尾先生を囲む食事会を開いてきた。

共同通信の関連会社の経営の仕事から退くと、松尾先生は今世紀に入って、ジャーナリストに復帰した。中でも力を注いだのは、先の大戦で敵として戦った各国と日本の間で本当の和解が成るようにと、『首脳による相互献花』を呼びかける言論活動だった。

二〇〇五年、米紙ウォールストリート・ジャーナルに寄稿し、欧州での和解の事例に触れつつ、『ブッシュ大統領は広島原爆死没者慰霊碑に花をたむけてほしい』と提言した。

このころから松尾先生とお目にかかる機会が増えていった。そのおかげで、私は二〇〇九年、朝日新聞に特ダネを二本出すことができた。

「硫黄島滑走路、移設へ 島内、別の場所に地下遺骨の搜索要望受け」という見出しの原稿は一月二三日、夕刊の社会面トップに載った。「米大統領、幻の広島訪問 74 年の来日前に、フォード政権検討」は九月一五日の朝刊一面トップ記事となった。

松尾先生は二〇〇九年に著書『オバマ大統領がヒロシマに献花する日』を出版し、日本首相の真珠湾訪問も提案した。日中、日韓、日ロ、そして、いつ日か北朝鮮との間でも「和解の儀式」をもつべきだとも。

最初は突飛にも聞こえた提言はやがて多くの人の共感を集め、日米の政治レベルで課題として認識されていた。その結果、二〇一六年、広島でのオバマ大統領の献花、真珠湾での安倍首相の献花が実現した。

そのころ、お酒の入った席で、松尾先生の口から昔の話を聞くことがあった。岡田啓介首相の身代わりにその秘書官だった祖父を殺害された二・二六事件の記憶を問わず語りにたどった。学習院大学の同級生で演劇仲間だった小野洋子さんが共同通信ニューヨーク支局員だった松尾先生の新婚の家を訪れ、「来週からロンドンに行くの」と言ったときの様子も振り返った。そのロンドンでオノ・ヨーコはビートルズのジョン・レノンと出会う。

晩年の松尾先生は日韓の真の和解を呼びかける活動に力を傾けた。従軍慰安婦の問題にも向き合おうとした。あるとき、赤坂の中華料理店で相談を受けたことがある。誹謗中傷や嫌がらせの恐れなど、私からは様々な危険性があると指摘した。それでも松尾先生は行動を止めず、言論を控えなかった。

平成が間もなく終わろうとする二〇一九年二月二五日、松尾先生は出張先のニューヨークで亡くなった。日本時間では二月二六日。祖父が殺されたのと同じ日だった。

葬儀では、平成の半ばに天皇の侍従長を務めた渡辺允（まこと）宮内庁参与が弔辞を読んだ。

「松尾さんは学習院の清明寮で当時の皇太子殿下と同室になられた。それをきっかけにして、以来、こんにちまで変わることなく、ひたすら天皇・皇后両陛下のために思われ、折に触れて、御所をお訪ねになって、いわば『世間に向かつて開かれた一つの窓』の役割を果たしてこられたと私は私なりに理解しております。おそらく

松尾さんは御所でも、率直で忌憚のない意見を誠実に披露しておられたに相違なく、両陛下も松尾さんを深く信頼してこられたことと拝察しております」

私たち教え子との酒席であっても、松尾先生は天皇との会話を決して明かそうとはしなかった。しかし、その行動への熱情の背景に天皇との絆があるのだらうと私たちは察した。

松尾先生は、言論人としての勇氣、覚悟のあり方、構想力の大切さを教えてくれただけでなく、そのほかにも多くのものを私に託してくださったように思う。日本エッセイスト・クラブとの縁もその一つであり、だからこそ、私はその縁を大切にしたい。